

# 虹色ほたる

永遠の夏休み 上巻

川口雅幸 Masayuki Kawaguchi



アルファポリス文庫

思い出

懐かしくて遠い 夏の思い出

楽しくて すごく楽しくて

時間が止まればいいのに

そう思った

だけど時間はどんどん過ぎ去って

いつかはみんな大人になるんだ

オレも そして キミたちも

本当は過ぎ去ってゆくのは時間じゃなく

人間の方なのかもしれない

季節が変わって 風の色が変わって

いろんな事が目まぐるしく変わってゆく

楽しかった昨日が まるで夢だったみたい

でも オレは忘れない

キミたちがいたあの夏を

キミたちと過ごしたあの夏休みを

忘れない……

第一章

もう一つの夏休み

7

第二章

思い出の蛍

73

第三章

運命

127

第四章

最後の花火

203

〈下巻もくじ〉

第五章  
第六章  
最終章

決心  
約束  
永遠の夏休み

第  
一  
章

も  
う  
一  
つ  
の  
夏  
休  
み

1

お父さんはかぶと虫とりの天才だった。

「いいかユウタ。昼間にはな、太陽の当たってない場所の木を探せ。で、傾いてる幹の、いいか裏側だ。裏を見るとデカイのがあるもんだ。裏つてのは何でも見てみる価値がある。ビデオもな！ わははははっ！」

訳の分からない事を言う。だから適当に返事してると、

「ホレ、三匹目だ。こいつあマジでかいな！ わははははっ！」

ってな具合だ。だからオレは、いくらお母さんに頭が上がらなくても、いつも変な事ばかり言っても、お父さんを尊敬していた。

だけど。今年はお父さんと一緒じゃない。そう。もうバイクの後ろに乗ることも、変な冗談を聞く事も出来なくなつたのだ。

去年の夏休み最後の日。お父さんは交通事故に遭って、そのまま帰らぬ人となつてしまった。あまりにも突然の事だった。



事故は、ケータイでメールしながら運転していた車がカーブを曲がりきれず、お父さんのバイクと正面衝突しやがった、というものだった。

どっちも結構なスピードだったらしく、バイクも車も大破してしまうほどの。お父さんは死んだのに、そいつは車の最新設備に守られて全くの無傷であった。事故つたのは、そいつのせいなのに……

オレが車を嫌いな理由は、そこにもあるって訳。

お母さんもオレも笑いながらお父さんの話が出来ようになったのは、ごく最近になってからだ。あれからもう一年が経とうとしている。

今年、かぶと虫とりに一人で行こうと思つたのは、そこがお父さんとの思い出の場所だから。毎年、夏の一番の思い出だった、お父さんと一緒に来るはずのこの場所に……

《次は蛭ヶ丘ダム入り口、終点です。ご乗車ありがとうございました》

無人の車内に丁寧なアナウンスが流れる。結局、終点までの間バスの乗客はオレ一人だけ。そりゃそうだ。こんな所にわざわざ来る人なんてそうはいない。ダムなんてただでさえあんまり行かない場所だろう。ましてや使われていないダムなんて。

——「お父さん、どうしてこのダムは使えないの？」

——「あーここはな、ダム自体は完成したんだが、水道設備の工事の途中で、どういう訳か打ち切りになったんだよ。だから今の水道は別の場所からの供給だな」

——「ふうーん。いつかは使えるようになるのかなあ？」

——「ん〜どうかな。国の偉い人の考えは分からんからなあ。ただ一つだけ言えるのは、こんなダム、無<sup>む</sup>ダム駄<sup>だ</sup>！ って事だな！」

——「……」

——「アラ……。じゃあこれはどうだ？ ダムダコリヤ！」

——「……もういいよ」

停留所に降りると、バスは一旦上の方へ行きUターンしてきたらしく、ゆるゆらかげろくに揺られながら戻ってくると、真っ白な排気ガスを残して走り去って行った。

ジ————……ミ——ンミンミンミンミンジ——……

むせ返るような熱い空気を、見事にサウンド化したような夏の音たち。ジリジリと照りつける太陽と、深い緑だけが支配する世界。ここには、いつもと変わらない夏がやって来ていた。

歩き出すと、真っ黒な短い影が足元にくっついてくる。

陽射しはまるでオレの頭上だけに照準をあてているかのよう。

風もほとんどなくて、とにかく暑い。

「あ、そうだ。電話しなくちゃ」

ポケットからケータイを引っこ抜く。今時誰も持ってない、折りたたまない渋いヤツだ。おまけに黒くて画面も小さい。ストレートタイプなんて言うとかだか格好いいけど、ただ単に古いだけ。当然だけどオレの趣味じゃない。流れてくる汗をTシャツの袖で拭きながら電話をかける。

「あ、お母さん？ ……うん、今着いた」

片方の耳でセミの大合唱を聞きながら、電話の向こうではスーパーの店内放送のBGM。何だか妙な気分。どうやらお母さんは買い物らしい。

《今晚、何食べたい?》

「んー……何でもいい!」

《それ、一番困るのよー。あんた、お父さんと一緒だ》  
だって思いつかないんだもん。

結局カレーライスって事で話がつき電話を切る。

そう言えば、お父さんもお母さんと電話でよくこんなやりとりしてたっけ……

——「ねえ、今晚何がいい? 食べたいものある?」

——「んーそうだな。おいしいものがないナー!」

——「それじゃあ分かんないでしょ! 何かないの? リクエスト」

——「何でもいい!」

——「だあかあらあ、食べたいもの言つてよくもおっ!」

——「じゃあ……ヨシギユウ!」

——「一人で食つて来なさい!」

本当は皆が持っているようなカメラ付きのが欲しかった。もちろん『折りたたみ』のヤツ。だけど、オレはこの古臭いケータイを使う事にしたのだ。と言うのも、実はこのケータイには、お父さんの声がたくさん録音されているのだ。

何れもオレが借りた時に、お父さんがオレ宛てに伝言したもの。

そう、これは世界に一つだけしかない、お父さんのメッセージ入り携帯

電話。

形見であり、オレの大切な宝物だ。

停留所から更に坂を上がって暫く行くと、アスファルトが途切れる。

その先はデコボコした未舗装の道、ダートってヤツだ。



バイクで走るとバンバン跳ねてケツが痛かったつけ。

そのダートを少し行くと道が二つに分かれている。いよいよだ。

ここで右の平坦な道を進んで行くと、道路脇に目印である古ぼけた小さなお地藏さんが立っている。それを基点に林に入って行くと、例の樹液の多い木があるのだが……

「ん？」

感覚的に、確かお地藏さんはこの辺りだと思った丁度そこに、お爺さんが一人ポツンと座り込んでいた。こんな山奥で一体何をしているんだろう。

少し気にかけてつつ、お地藏さんの姿を探しキョロキョロしていると、突然そのお爺さんがニコニコしながら話しかけてきた。

「今日も暑いねえ」

白いシャツのボタンを三つ位開けて、首筋から頭にかけてハンカチで汗を拭く。にこやかではあるけど、その顔はどこか元気がない感じだ。

「すまんが水をくれんかのう。喉がカラカラで困っとったんじゃよ」

綺麗なピカピカのハゲ頭に真っ白な顎ヒゲ。ゆっくりと話すその口調は、

どこか品のいい感じがした。

一しきり汗を拭くと、横に置いてあった麦わら帽子を静かに被って弱々しくため息なんかついている。大丈夫かな。

「あの……これ水ではないんだけど、よかつたらどうぞ」

リュックからスポーツドリンクを取り出し、思い切って差し出してみる。本当はオレも飲みたかったけど。随分と弱ってて何だか可哀想だもんな。

「すまないねえ。坊やは優しい子だねえ」

お爺さんは、ペットボトルを受け取るや否や喉を鳴らして半分位まで一気に飲むと、

「いやあ、実に美味い水じゃのう、お陰で助かったわい。これでもう暫くしたら雨になる」

なんて言いながら満足そうに顎ヒゲを撫でた。って。

「アメ？」

「かなり強い風も吹く。嵐が来るのう。氣い付けなさいよう」

この真っ青な空の、一体どの辺りから雨が降ってくるんだよ。

大体、天気予報はここ一週間ずーっと晴れのマークだったはず。

しかも今年の夏は何十年に一度かの干ばつで、水不足が心配される位に降水量が少ないって昨日ニュースで言ってたばかりだぞ。

「久々の雨、恵みの雨じゃな」

お爺さんはペットボトルの残りを飲み干すと、また幸せそうにニコニコしていた。

そうか。このお爺さんボケてるんだきつと。飲みものもあげたし、もういいよな。少しは元気になったみたいだし。

オレは適当に挨拶をすると、引き続き目印のお地藏さんを求めて未舗装の道を歩き出した。



「ふう……」

今の気分と同じ位重く感じるリュックを降ろし、原っぱに座り込む。さつ

きの分かれ道を左にぐんぐん上がった先にある、ダム全体が見渡せる原っぱ。ここは丁度木陰になっていて、一休みするには絶好のポイントだ。毎年この場所で二人してジュースとか飲んで涼んでたんだよなあ。

結局、あれから二時間くらい経ったが、かぶと虫は一匹も捕まえる事ができなかった。それどころか、いくら歩き回ってもお地藏さんを見つけれず、例の木に辿り着く事すらできなかった。

「はあくあ、やっぱお父さんいないとだめなのかなあ……」

意気込んで来たものの、急に襲ってくる寂しさに打ちのめされ、一人、ダムのでっかい水門を見つめてボーっとする。

大自然に囲まれた巨大なコンクリートの壁。その威圧的とも言える存在感は、まるで現実の国と異次元の国とを区別する国境であるかのよう。水面には、木のでっぺんや電柱らしきものが顔を出している。

ダムは極端な降水量の少なさで、異常なほど水面が低くなっていた。

——「ユウタ。このダムはな、一つの村を沈めて出来たダムなんだよ」

最初の夏、お父さんにその話を聞いた時から、オレはこのダムに妙に興味  
が湧いていた。

ダムに沈んだ村。このフレーズを聞いただけで、好奇心旺盛な小学校低学  
年の男の子が、あれこれ空想するには十分過ぎるほど魅力的だった。

——「ねえお父さん。今年こそはオレ、あの水門のところまで行ってみた  
い！」

——「だーめ！ この斜面は急で危ないから、ここからは林に下りられな  
いように立ち入り禁止になってんだぞ？」

——「いーじゃん！ お父さんと一緒に行けば大丈夫でしょう？ ねー行  
こうよーいいでしょう？ 探検しようよう」

——「んーユウタ、お前身長いくつになった？」

——「一五二センチだよ」

——「カーッおしい！ あと一センチで合格だった、残念！」

結局去年も、何だかんだ理由をつけて探検させてもらえなかった。  
だけど、だめだと言われれば言われるほど行きたくなる。

かぶと虫がだめなら探検だ。身長だつて去年より三センチ伸びたし、基準  
はクリアだろ、お父さん！

オレは、ぶら下がっている立ち入り禁止の看板を横目に、服を引っ掛けな  
いよう慎重に有刺鉄線の隙間をくぐった。



ガガガ——ン！ ゴオオオ：ゴロゴロゴロ： ズザザアア——！！

追われているのか、行く手を阻まれているのか。まるで何かに集中攻撃を

命じられたかのように激しさを増す雨風。

強烈な青白いフラッシュに照らし出されると、大地さえも揺るがす雷鳴の威嚇砲撃が容赦なく襲いかかってくる。

「どうなってんだよ、もう！」

大声でも張り上げてないとオレという存在自体を掻き消されそうな、そんな激しさ。

こんな事になるなら、原っぱで大人しくしてるんだった。

いや、この嵐ならどこにいたって同じ事だ。むしろ途中で原っぱに引き返すよりは、バス停のある下の方に向かうのが賢明だろう。水門の近くなら、きつと雨風を凌げる場所があるはず。

濡れたTシャツに息苦しさを感じつつ、林の中を全速力で駆け下りる。

視界の悪さに目を細めると、雨と汗の混ざった滴が額を伝って目に入り込んできた。

「くそっ！」

痛みに、ぎゅつと目を閉じた次の瞬間、

「！」

突然何かに足を取られ、体がスローモーションで宙に浮いた。

不意打ちのような不可抗力によって投げ出された体は、空中で思いつきりバランスを崩しオレは……

ガツンッ！

鈍い音。火花が散る。

「痛っ てえ……」

鼻から口に広がる鉄みたいな味。地面に倒れこみ、低くなった視線の向こうにダムが霞んでゆく。

死ぬ時ってこんな感じなの？

やだよう オレまだ死にたくない……

遠ざかってゆく

雷の音が

風の音が

何もかもが 遠ざかってゆく

ダメだ お母さん オレ もう……

降りしきる雨――

いつしか林の中は煙のような濃い霧に支配され、オレは倒れ込んだまま、この大自然と一体になろうとしていた。

力尽き、吸い付くようにベッタリと地面に体を預けると、次第に五感を刺激する感覚の全てが、オレの意識の中から遠ざかっていった。

2

真暗闇。何にも見えない。ここはどこなんだろう。

暗いというのが分かる暗闇は暗黒ではない。色で例えるなら、絵の具で塗りつぶしたような黒ではなく、限りなく黒に近い透明なグレーとも言うの

か。真つ暗な部屋で目が慣れてきた時に、薄っすらと物の形が浮かび上がってくる。そんな暗闇。

そう、見ようと思えば見える暗さ。だけど何にも見えない。  
一体ここは……

あ、そうか。オレ死んじゃったんだきつと。何かに足が引っ掛かって、転んで。思いつきり頭ぶつけたもんな。

死んだらどこに行くのか。去年、お父さんの事故の後、お墓の前でそんな事を考えたっけ。天国とか地獄とか、別の世界があつて。

いい事をした人は天国。悪い事をした人は地獄。お父さんはきつと、仕事も真面目にやつてたし、天国に行つたんだよね？

そう、お母さんと話してた。

オレはどうだろう。普段の行いにおいて、そんなに悪い事はしてないはず。悪い事なんか……

自分の置かれている状況がどうで、この後どうなるのか。

暗闇の中、そういう未知の恐怖を感じるどころか、むしろ変に居心地のいいフワフワした感覚に包まれながらヤケに冷静な自分がいた。

「坊や。危ないところじゃったなあ」

ふと、声が聞こえた。ゆっくりとした口調、品のいい響き。

どこかで聞いたような……

「なあに心配はいらんよ。ちゃんと後で帰してあげるから」

この声は……さつきのお爺さん？

「本当は、あんまりやつちやいけん事なんじゃが……さつきの恩もあるからのう。それに坊やは、ぎりぎりセーフなんじゃ」

何の事を言ってるんだ？

「ただ、手続きが少々面倒だな。一週間ほど時間がかかる。わしらなりにオキテがあるんじゃよ。まあ、ゆっくりしていきなさい」

だから、意味分かんないよ。

「時間も、全て元の状態に戻せるから大丈夫じゃよう。安心するがよい」  
スルガヨイなんて言われてもさあ、言ってる意味が全然……

「ちよくちよく様子見に来るからのう。それじゃあ……」

ちよ、ちよつと待ってよ！ 何がナンだかさっぱり分かんないよ！

「大丈夫じゃ……よう……」

遠ざかる声。

「お爺さん待ってよう！ オレを独りにしないでよう！ 待って、待ってくれよう！」

オレは必死で叫んだ。暗闇に向かって、あらん限りの大声で。

「待って——っ！」

その凄まじい、悲鳴のような叫び声を発しながらオレは……

目が覚めた。

「……」

ジ———— ミ——ンミンミンミンミンジ——…

「……」

ミ——ンミンミンミンジ—— シャワシヤワシヤワジ——…

むせ返るような熱い空気を、見事にサウンド化したような夏の音たち。つて。何だったんだ今の。あれ？ 雨やんだのかな。

すごい風と雷でオレ焦って、急いで駆け下りてたら転ん……

「だあああ？」

辺りを見回すとそこは、さっきまで一休みしていたあの原っぱだった。

「ど、どういう事だ!？」

オレは確かにダムを指指して、ここから斜面を下っていたはず。

有刺鉄線をくぐり雑草の道を抜け、林に入り、途中で転んで。

それで頭を強く打って……

「そうだよ、頭！」

声に出すより早く、両手で頭のおちこちを触ってみるがどこも何ともない。痛くもないし、血が出ている訳でもない。夢を見ていたのか。

確かにリアルな夢というのはある。今回の夢も、すぐリアルなスリル満点の夢だったという訳か。現に、土砂降りの雨が降った跡なんてこれっぽっちもないし、頭もどこも、ケガしてる箇所はない。

「何だよ、オレいつの間に寝ちゃったんだろ」

全てが夢であった事に胸をなで下ろす。

「それにしてもリアルな夢だったなあ」

大きくため息をつきながら後ろに寝転ぶと、原っぱの草が優しく体を受け止めてくれた。草の匂い。セミの声。見上げると、木の葉の間から太陽の光がこぼれていた。

「生きてるって、いいな」

死んだらこんな当たり前の事も感じられなくなるんだらうな。

お父さんも、もっと生きていたかったらうな……

あんな夢の後だから余計にそう思う。

今日、ここに来て良かった。かぶと虫は一匹も捕まえられなかったけど。

ここに来るのは今年で最後にしよう。来年は中学だし、かぶと虫なんて追いかけてる暇もなくなるだろう。いつもより少し早いけど、そろそろ帰ろうか。バイクなら時間の自由がきくけど、バスはそうはいかないもんな。



「あれ？」

時間を確認しようと、ケータイを取り出すべくポケットに手をやったが、いつまでたつても探りあてられないでいる。さっきまで、この原っぱに辿り着いた時までにはちゃんとあったのだ。その時に時間を確認しているから、それは確かな事。

「おかしいなあ」

他のポケットもリュックの中も全部見てみたが、ケータイはどこにも見当たらなかった。

「何だよマジかよ。どこにいったんだよう」

泣きそうになる。

あれはただのケータイじゃない。オレの大事な、お父さんの形見。

すごく大切な宝物。失くしたら新しいのを買えばいいとか、そういう問題じゃない。あのケータイを失うのは、お父さんの思い出を失うのと同じようなものだ。絶対に絶対に見つけなきゃ。

木や草の影が少しずつ長くなる。真っ白だった陽射しが次第に黄色味を帯

びて、原っぱを柔らかく包み込んでいた。

滴り落ちる汗、汗。

いつの間にかセミが鳴きやんでいた事に気付く余裕もなく、オレはひたすら原っぱを這いずり回っていた。

どの位の時間が経ったのだろう。かなり念入りに探しているにもかかわらず、ケータイはその姿を一向に現そうとはしなかった。

「まいったなあ」

こうしてずっと地面とにらめっこしながら這っていると、何だか警察犬にでもなっちまった気分だ。

もう腰のたるさがビークにさしかかっている。

ズボンの膝の部分は見事に草色に染まり、手も真っ黒。

オレは半ば諦めの気持ちで、腰に手を当て、同じ姿勢にすっかり固まった体を伸ばすべく上体を起こそうとした……

その時。

「何してるの？」

不意に後ろから小さな声に話しかけられる。ゆっくりと振り返ると、そこには小さい女の子が少し首をかしげて立っていた。

薄いガーゼみたいなふんわり白いワンピースに、チカチカで縁取られた大きな花がくつついてるピンクのサンダル。

足元で、こじんまりハの字に寄り添って咲いてる。

「ケータイ、失くしちゃったんだよ」

「ケー…タイ？」

ノースリーブのフリフリから伸びた細い腕を後ろに回して、更に首をかしげながら大きな目をパチクリさせる。

よく考えてみれば、こんなところにオレ以外に子供が、しかも低学年の女の子が一人でいる事自体不自然なのだが、今のオレには、そんな事を気にす

る元気も残っていなかった。

「何年生？」

「あー、六年だけど」

「どこから来たの？」

この子、質問魔かよ。

ま、いいんだけどさ。オレそろそろ帰らなきゃいけないんだよな。

「ねえ、キミ、今何時分かる？」

面倒臭くなって、こっちから話題を変えてやる。

「うんとねえ、さつき、もう五時になるから帰った方がいいって、お兄ちゃんが言ってた」

「あ、そう。もう五時になるんだあ…って！ ゴ、ゴ、五時い？」

何てこった。ケータイを探すのに夢中になって、すっかり時間の感覚を忘れていた。それに、まだ明るいから大丈夫だと思っていたのに。

「や、やばいよ！ ねえ、まだバス行つてないよね！」

一大事だ。そのバスに乗れないと今日中に家に帰れないのだ！  
ところが、焦るオレに向かって、その子がキョトンとした顔で言う。

「バス？ ここにはバスなんて来ないよ？」

「いや、ダム入口にあるバス停に来たバスが、もう行っちゃったかどうか  
て話だよ？」

それでも尚、キョトンとして首をかしげる女の子。

もういい！ オレは急いでるんだ。この子の相手をしてる暇なんか……

「バス停なんてないよ？ だって、ずっとずうーっと下の方までしかバス通  
ってないもん」

その場を立ち去ろうとするオレに追い討ちをかける。

「じゃあ聞けど！ キミはどうやって帰るの！」

「歩いて帰るよ」

「歩いてって、キミン家はどこにあるんだよ！」

「あっち」

右腕をピンと伸ばして人差し指を立てる。

馬鹿げてる。何が「あっち」だよ、ダムの方を指して。もう付き合っ  
てらんない。

「まあいいや。じゃあ、気をつけてお家に帰るんだよ？」

そう。オレはもう六年生。来年には中学生になる。もう立派な大人だ。こ  
んなところで、小さい子と言い争ってても始まらないもんな。

そう自分に言い聞かせながら、フツと肩の力を抜く。

そして何げなく女の子が指差すその方向に目を向けた。

「……？」

その指差す方向に、

「……？」

その先には、

「……………!?!」

村があった——

——「人間つてのは、本当に驚いた時には何も言葉が出ないもんだ」

いつかお父さんが言った言葉。

今まさにオレは、その状況に立たされていた。

カナカナカナカナカナカナカナ… カナカナカナカナ…

いつしか原っぱに夕闇が押し寄せようとしていた。

眼下に広がる、黄昏色たそがれに染まる山間の集落。

呆然と立ち尽くすオレの周りで、ヒグラシが鳴きやむことなく、いつまでもその甲高く美しい声を響かせていた。

3

「こ、こんな事って……」

女の子が指差す方向。一番最初の夏、一年生の時ここに初めて来た日からずっと見てきたあの風景が、あのダムが、忽然こっぴげんと姿を消していた。

リアルな夢。限りなく現実味を帯びた、現実なのか夢なのか区別がつかない位のリアルな夢。突然もの凄い雨が降ってきて、強い風が吹いて。雷の衝撃波だつて本当に生々しかった。

頭を強く打った時の感覚なんて、今思い出しても身震いしそうなほどに覚えてる。死ぬかと、いや、死んでしまったんだと思った。

その位リアルな夢。

オレはついさっき、その悪夢から覚めたばかりだ。

そう、あれは夢だったんだ。今、確実にオレは目を見開いてすっかり起きているのだ。だとしたら、一体この状況はどう説明できるというのか。

「一緒に帰ろ？」

気がつくとき、その女の子がオレのすぐ傍で微笑んでいた。

「いい、一緒に帰る？ オレと？」

「うん！」

初対面だつてのに、そうするのが当然、みたいな顔してる。

どことなく不思議な感じのする子だと思った。

いや、この状況自体が既に不可思議なのだが、この子の場合それとはまた別の不思議さと言うか……

「おーい、さえ子おー！」

少し遠いところから聞こえてくる声。その声はだんだん大きくなり、やが

て薄暗くなった原っぱの向こうに人影が見えてきた。

「やっぱりここかあ。ほら、もう暗くなるから帰るぞ！」

やって来たのは、恐らく六年生だろうか、クラスで後ろの方に並んでるオレと同じ背位の男の子だった。

「あれ？ 誰かと一緒なのか？」

白いランニングシャツにベージュの半ズボン。グリグリの坊主頭の下は真っ黒に日焼けした顔。こちらからはその姿がすっかり見えるけど、夕焼けの逆光で、そいつからはオレの事がよく見えない様子。

「ん？ 誰だお前」

近づいて来る白いランニングシャツ。よく見ると、ちよつとゴツイ感じでケンカとか強そう。変にからまれなきやいんだだけ。

「この辺のヤツじゃねーな。どつから来た？」

ほら来た！ 一番答えに困る質問だあ。ああ、どうしよう。

突然訪れたピンチに動揺するオレ。しかし一瞬の沈黙の後、口を開いたのはその女の子だった。

「さえの……さえのイトコのお兄ちゃんだよ。バスでね、さえん家に遊びにきたの」

「……おーそうか！ さえ子のイトコか、都会から来たんだな？」  
オレがこの子のイトコ？ どうなってるんだ？

思いもよらない展開に、ただただ意味不明な薄ら笑いを引きつらせるオレ。もう何が何だかさっぱり分かんない。

「よく来たな！ 俺はケンゾー。さえ子ん家の隣りに住んでるんだ。よろしくな！」

ランニングシャツ君は、真っ黒に日焼けした手を差し出した。

さっきこの子が言っていた『お兄ちゃん』は、どうやらこいつの事ではないらしい。取りあえずこのケンゾーってヤツ、見かけによらず友好的で良かった。

「オレはユウタ。こちらこそよろしく……」

戸惑いながらも握手する。ケンゾーの手はでかくて大人の手みたいだった。握る力も強くて、オレの手を飲み込んでしまいうようなほど。こいつとケンカ

なんてしたら絶対勝てないだろうな。そう思う。

「お！ セミか？ カブトか？ 何匹捕まえた？」

そのケンゾーが、坊主頭をボリボリ掻きながら虫かごをマジマジと見る。

「あれ？ カラッポじゃねーか。あーこれから蛍捕まえんのか？」

「いや、かぶと虫とりに来たんだけど、全然ダメだったんだ」

「何だよ、カブトならいーっぱい居るところ知ってるぜ？ ミヤマとかノコも結構いるんだ」

「マジで？ ミヤマもいるの？ すげえ……すげえよ！」

つつい興奮してしまう。オレは、かぶと虫が大好きだ。でも同じくらいクワガタも好き。中でも、あのゴツイ身体のみヤマクワガタが大好きなのが、最近じゃデパートくらいでしかお目にかかれないほどの貴重品だ。

そのみヤマが「結構いる」なんて！ これで興奮せずにいられるかってんだ！

「いいなあ、そんなところあるんなら行ってみてえ！」

「おお、任せとけ。明日にでも連れてつてやるよ！」  
オレは、自分の置かれてる状況なんか完全に忘れて、今会ったばかりのケンゾーとすっかり意気投合していた。

そしてその横には、オレたちの様子を楽しそうに眺めるさえ子の笑顔。  
「良かったね、ユウタ君」

ニコニコしながら言う。

「なあ、そろそろ帰ろうぜ？ さっきから蚊が寄ってきて鬱陶しいんだよ」  
ケンゾーが腕や足をあちこちピシャピシャ叩く。

原っぱは、もうすっかり暗くなっていた。

「ね、帰ろう？」

「う、うん……」

オレは、やたらと説得力のあるさえ子の笑顔に諭されるようにして、原っぱを後にした。

すっかり暗くなった山道を、白いランニングを頼りに暫らく下っていくと、

少し先に頼りないほどに小さく、おぼろげな光が二つ見えてきた。

「あ、お明神様、もう灯りがついてる」

「ああ、もうすぐお祭りだからな。準備とか始まってんだろ」

隣りを歩くさえ子の眩きに、ケンゾーが前を向いたままぶつきらぼうに答える。

その小さな光は灯籠の灯りだった。神社らしき高台へと続く石畳の階段。  
その石段を挟んで両側にある、やはり石で出来た灯籠。

中の短いロウソクが、辺りの暗闇をぼんやりオレンジ色に照らしていた。  
今歩いてきた山道と、この石段の上がり口がぶつかった道の先には、大きな鳥居が立っていた。本来なら神社の境内への入り口になるんだらうけど、ここに迷い込み、初めてこの鳥居をくぐるオレとしては、丁度村への入り口のように思えた。

鳥居をくぐり、拓けた道を歩いていくと、あちこちの家からもれる窓の灯りが目についた。所々にある水銀灯には、その青白い光に魅せられた虫たちが、この時を待ち望んでいたかのように盛んに飛び交い羽音を唸らせる。

そんな生活の光たちに、オレは改めて別の世界に來た事を実感していた。

46

「あゝあ、真つ暗になつちまつたな。じゃあ、ユウタ。また明日な！」  
会話が一段落ついた次の瞬間、ケンゾーが一步横にそれる。

「お、おい！ 待ってくれよ！」

「ん？ 何だ？ あーここが俺の家。な？ 隣りだろ？」

「あ、いや……その、オレ……」

「心配すんなって！ かぶと虫だろ？ ちゃんと連れてってやるよ！ じゃーな！」

それはもう、めちやくちやいい笑顔で手を上げながら家の中に駆け込んでいった。

「さえたちも、お家に入る？」

「でもオレ、あの……」

「あらあら、さえ子、遅かったねえ。ご飯出来とるから、はよ手洗っておいで」

戸惑つて躊躇<sup>ちゆうちゆう</sup>するオレを出し抜けに出迎えてくれたのは、小さくて可愛らしいお婆ちゃんだった。

「あ、お婆ちゃん。イトコのユウタ君だよ。さえ、お迎えに行つてたの」

「……あらまつ！ 大きくなつて！ ここまで遠かつたじゃろお？ さ、さ、あがつて頂だい」

また。

大きくなつたも何も会つた事ないでしょ、お婆ちゃん。

ああ、オレ頭おかしくなりそ……

「ユウタ君もお腹空いてるでしょ？ 一緒に食べよ？」

「あれ、元氣ないねえ。疲れとるんじゃない？ 風呂も沸いとるよ。田舎でなあんもないがのお、ほれ、遠慮しないで、上がつてゆつくりしんしゃい」

目尻や口元にくつきり刻まれた笑いじわが、言葉を発する度より深くなる。そんなニコニコ顔の優しいおもてなしに戸惑いながらも、オレは促されるまま家の中に入った。





チャポン……

天井からの滴。落ちた点からお湯の上を輪の様に広がってゆく小さな波。その波紋を、ポーっとしながら目で追う。

結局オレは、勧められるがまま風呂に入る事になった。

躊躇ためらいながら脱衣所に行くと、入れる所が二つある洗濯機の蓋の上に、新しいタオルと石鹸が用意されていた。

更に、洗面所の上の棚には歯ブラシが二本入ったコップがあり、その横には既にオレ用と思われる別のコップと新しい歯ブラシまでもがセットされていた。どうやら、今夜この家に泊まるのは、ほぼ確定らしいことを思い知らされたのだった。

ピチヨン……

今度は別の位置に落ちる。広がった輪の模様は、やがて淵に当たって壊れ消えてゆく。

「はあく、それにしてもなあ……」

風呂の中、そんな止め処ない水の戯れを眺めながら、オレは自分の身に起こった今日という長い一日を振り返っていた。

すると、湯気の向こうから聞き覚えのある声が聞こえた。

「うや……坊や……」

あのお爺さんだ！

「大丈夫じゃったろう。いい人たちが良かったのう。ちよっと前の時代じゃが、そんなに不便でもないはずじゃよー」

「ねえ、これって一体どういう事なの？」

ここぞとばかりに、不思議に思っている事を聞いてみると、お爺さんは、あのゆっくりとした調子で話し始めた。

「ここに来て一番最初に出会った人、その人の時間に坊やの事を一時的に組み込んでるんじゃないよ。さも昔から知っていたような……。周りの人も皆、そ

れに同調する。言うなれば、その人たちの時間を借りている訳じゃな。しかし、あくまでも一時的にじゃ。だから坊やが元の世界に戻れば全ては元に戻る。元々その時代に坊やはいなかったんじゃないからな」

「そ、それでいつ帰れるの？ ねえ！ 早く帰りたいよう！」

これが今のオレにとつて本来最も聞きたかった事であり、切実な願望そのものだった。しかし、次にお爺さんから発せられた言葉は、信じられない、いや、信じたくない内容だった。

「それなんじゃが。一週間の予定が、色々と込み合っておつてのう。二週間、いや、一ヶ月位先になりそうなんじゃよ。それを言いに出て来た」

「い、い、い、一ヶ月？」

「一ヶ月と言つても、坊や自身は時間の外にいるのも同じじゃ。元に戻る時には、あの時間のあの場所に戻るから心配せんでいい」

冗談じゃない！ こんなところに一ヶ月も居なきやいけないなんて！

「出来るだけ急ぐから待つとつてなあ。それじゃあ……」

「あ！ またフェードアウトする気？ お爺さん待つてよう！」

「また来る……よう……」

遠ざかる声。

例によつて、遠ざかる声に向かって叫びながらオレは……

ボツ…ガボツ…ブクブク……

「……くん ……ユウタ君？ あんまり遅いから、お婆ちゃんが見て来いて。ユウタ君？」

ブクブクブクブクブク……

「ユウタ君！ どうしたの？ 開けるよ！」

ガラガラガラッ！

「つぶはあーっ！ つはあー！ つはあー！ つはあー！ つはあー！」

危ない。いつの間にかお風呂に入ったままで寝てた。

溺れるかと思つたよ。

「ユウタ君どうしたの！ 大丈夫……キヤーツ！」

何だ？ いきなり奇声上げて駆け出して。

立ち読みサンプル  
はここまで

やっぱ変な子だよなあ、あの子……つて。

「げっ！」

そう。

苦し紛れに勢いよく立ち上がったオレは、今やっと事の重大さに気付いたのだった。

「フ、フ、フルチン見られたあああ！」

——こうして、オレのもう一つの夏休みが始まるうとしていた。

4

「ユウタ。ほら、早く後ろに乗れ」

あ、お父さん待って、今行くから。

「早くしないと置いてくゾー」

今行くつてば。ちよつと待っててよう。

「じゃーな、ユウタ」

やだよ。オレも行くんだから。お父さん待ってたらあ！

「じゃーな……」

お父さん！ 置いてかないでよう！ お父さああん！ ……

目が覚める。

あの夢だ。ここんとこ暫らく見てなかったのに。

去年、お父さんが死んでからというものの毎日のように見てた夢。

二人でどこかに出掛ける時の場面で、決まってお父さんに置いてかれる。

何で待っててくれないのかという悔しい気持ちと、一人残されたという絶望感。目が覚めると、夢の中だけじゃなく、お父さんはオレの前から本当に